

(第1号様式)

プロジェクト登録申請書兼Jブルークレジット<sup>®</sup> 認証申請書

ジャパンプルーエコノミー技術研究組合 御中

(代表申請者) NP0法人 江の島・フィッシャーメンズ・プロジェクト

住所：神奈川県藤沢市江の島1-3-12

氏名：理事長 北村 治之 ⑩

法人番号：5021005012908

(共同申請者) 江の島片瀬漁業協同組合

住所：神奈川県藤沢市片瀬海岸2-20-25

氏名：代表理事組合長 北村 治之 ⑩

法人番号：8021005000414

Jブルークレジット制度実施要領の規程に基づき、次のとおりプロジェクト登録兼クレジットの認証を申請します。

プロジェクト番号	新規申請
プロジェクト名称	江の島に海の森『藻場』をとりもどそう

プロジェクト区分 (複数選択可)	自然基盤 吸収源の回復、維持、劣化抑制
プロジェクト情報	<p>江の島と言う地形はメリットとデメリットがはっきりしている地形です。南の風に弱く、活動に支障をきたすことも多い立地です。</p> <p>しかし砂地の中に隆起した島である江の島は、島の両側に川があり、栄養素は川によって運ばれ、プランクトンの発生がおき、良い漁場とも言えます。この砂地に守られている区域の中、昭和39年のオリンピック開催時にヨットハーバー建設の為に埋め立てられる以前は島を取り囲む様に藻場が生息していました。その後は島の南側の磯から鎌倉にかけて広がっていた藻場も徐々に減り始め2017年の大型台風をきっかけに、大きく減少致しました。2019年には大型海藻の姿は減り、養殖事業として継続されていたワカメが生息するだけとなりました。漁獲高の減少が著しいのはアワビです。2020年にアワビの稚貝15650個を放流しましたが、1個もその後の生息を確認できませんでした。藻場の減少が原因と推測しています。又江の島のイセエビ、サザエも減少しています。</p> <p>江の島は元々ウニの生息はさほど多くなく、魚による食害と考えられていました。そこで、藤沢市農業水産課は江の島片瀬漁協と協力し、アイゴに対しての買取制度を始めました。</p> <p>又藤沢市内の小学校は漁港見学を毎年春に実施しています。行政や漁協では補えない部分をNPO法人江の島・フィッシャーメンズ・プロジェクト(以下EFP)が漁場生産力・水産多面的機能強化対策事業(以下多面)を活用しダイバーによる藻場保全活動を2014年にスタート致しました。スタート当初はモニタリングをしていますが、大型海藻は生息していましたが年々減少し、2021年にカジメは全滅状態でした。ワカメの養殖事業者も年々減少し、現在ではEFPのみとなりました。</p> <p>養殖からこぼれるワカメの種も確実にあります。このまま養殖が無くなれば、ワカメも全滅してしまいます。</p> <p>これは江の島の漁村文化も絶えてしまう事に繋がります。現在EFPを中心に、行政・漁協と協力し、多面だけではなく、幅広く保全活動を広げる為に、かながわ海業モデルの選定をうけ、啓蒙活動である『江の島の海を守ろう』フェスタの開催は一般の方々だけでなく、学校単位体験学習・企業CSRにも活用されるまでに広がり続けています。活動の拠点である、片瀬漁港は新江ノ島水族館が隣接しており、多面から海業まで活動を共にしています。研究機関としても頼もしいパートナーです。藤沢市も2021年2月に「藤沢市気候非常事態宣言」を表明後、2022年3月に「藤沢市地球温暖化対策実行計画」「藤沢市環境保全職員率先実行計画」を改定し、以下の温室効果ガス排出量削減目標を掲げています。【藤沢市地球温暖化対策実行計画】藤沢市域全体を対象に2030年度で46%削減(2013年度比)【藤沢市環境保全職員率先実行計画】藤沢市役所内の公共施設を対象に2030年度で56%削減(2013年度比)これらの目標達成に向けて、本プロジェクトは藻場再生を通じてCO<sub>2</sub>吸収源の回復や拡大を図り、地域のブルーカーボン機能を高めることで大きな役割を担うと考えています。</p>
クレジット取得理由	<p>多面以外の詳細なモニタリングや、2025年から着手した市内公園伐採木を活用したアオリイカ産卵床設置など、藻場再生を柱としたCO<sub>2</sub>吸収源の回復・拡大を推進する取り組みとして、Jブルークレジットの取得を進めています。</p> <p>クレジット販売を通じて安定的な活動資金を確保し、購入企業にはCSR連携や異業種との共同実験を促すことで、地域社会全体で地球温暖化対策を加速させることができると考えています。</p>
クレジット取得後の計画や見通し	<p>幸いなことに、江の島に合った保全活動の手法も見え始め、効率良く大型海藻の定着を実現できる段階にきています。</p> <p>今後は新江ノ島水族館での培養を進め、江の島生まれのカジメを育成し、ワカメの種系も江の島由来で生産することで、この海域に適した海藻による藻場の復活に臨みます。</p> <p>Jブルークレジット取得後は、これらの取組をさらに拡大し、藻場の拡充を通じてCO<sub>2</sub>吸収源の回復や拡大を一層推進していく計画です。</p>
申請対象期間に実施した活動の概要	<p>本件における磯焼け対策・藻場保全活動の主体は、地域において継続的に活動を行ってきたNPO法人江の島・フィッシャーメンズ・プロジェクトが担っており、当該活動に対して漁場管理や現場での作業協力等のサポートを江の島片瀬漁業協同組合が行った。</p> <p>NPO法人江の島・フィッシャーメンズ・プロジェクトが実施した磯焼け対策・藻場保全活動の内容は次に記載。</p>

申請対象期間に実施した活動の概要	<ul style="list-style-type: none"><li>・カジメスポアバック設置 2024年11月17日、ポイント5,6 2024年11月24日、ポイント5,6</li><li>・カジメロープ設置 2025年1月31日、ポイント8 2025年2月9日、ポイント8</li><li>・ウニ駆除 2025年2月16日、ポイント2,3,4,5,6、70個</li><li>・モニタリング(軽微なメンテナンス含む) 2024年12月29日 2025年3月23日 2025年4月25日 2025年4月27日 2025年5月27日 2025年5月31日</li></ul>
プロジェクト実施開始日	2015年～現在

項目1	①対象生態系面積の算定方法	【生態系】海藻 【藻場】ワカメ場 【構成種】ワカメ
	②クレジット認証対象期間	2024年10月02日～2025年10月01日
	③対象とする面積	【面積】 3.754832(ha) 【面積の算定根拠】 C02吸収量算定に関する資料.pdf 【面積の資料】 C02吸収量算定に関する資料.pdf
	④吸収係数	【単位面積あたりの吸収量】 4.2 【単位面積あたりの吸収量の算定根拠】 C02吸収量算定に関する資料.pdf 【単位面積あたりの吸収量の資料】 C02吸収量算定に関する資料.pdf

項目1	⑤吸収量算定方法	<p>【計算に利用した式】 式1</p> <p>【算定結果（吸収量）】 15.77(t-CO<sub>2</sub>)</p>
	⑥确实性の評価	<p>【対象生態系面積等の評価】 60%</p> <p>(面積：3.754832(ha)×評価：60%)</p> <p>【吸収係数の評価】 72%</p> <p>(吸収係数：4.2×評価：72%)</p>
	⑦調査時に使用した船舶の情報	<p>【船舶の種類】 調査船 (51kW / 70PS 程度)</p> <p>【台数】 1隻</p> <p>【稼働時間】 3.00(h)</p> <p>【出力】 51.00(kW)</p> <p>【燃料の種類】 軽油</p> <p>【CO<sub>2</sub>排出量】 0.057(t-CO<sub>2</sub>)</p>

項目1	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【C02吸収量】 0(t-C02)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 対照区については2022年のデータと2025年のデータにおいて藻場の状態に変化は確認できず、自然変動の影響はないと判断できる。また、活動区においては2022年は藻場の消失が確認できる。以上のことを踏まえ、ベースラインはゼロに設定する。</p> <p>【資料】 C02吸収量算定に関する資料.pdf</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	6.755(t-C02)

項目2	①対象生態系面積の算定方法	【生態系】海藻 【藻場】アラメ場 【構成種】カジメ
	②クレジット認証対象期間	2024年10月02日～2025年10月01日
	③対象とする面積	【面積】 1.654787(ha) 【面積の算定根拠】 C02吸収量算定に関する資料.pdf 【面積の資料】 C02吸収量算定に関する資料.pdf
	④吸収係数	【単位面積あたりの吸収量】 4.2 【単位面積あたりの吸収量の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【単位面積あたりの吸収量の資料】 C02吸収量算定に関する資料.pdf

項目2	⑤吸収量算定方法	<p>【計算に利用した式】 式1</p> <p>【算定結果（吸収量）】 6.95(t-CO<sub>2</sub>)</p>
	⑥确实性の評価	<p>【対象生態系面積等の評価】 60%</p> <p>(面積：1.654787(ha)×評価：60%)</p> <p>【吸収係数の評価】 72%</p> <p>(吸収係数：4.2×評価：72%)</p>
	⑦調査時に使用した船舶の情報	<p>【船舶の種類】 調査船 (51kW / 70PS 程度)</p> <p>【台数】 1隻</p> <p>【稼働時間】 3.50(h)</p> <p>【出力】 51.00(kW)</p> <p>【燃料の種類】 軽油</p> <p>【CO<sub>2</sub>排出量】 0.067(t-CO<sub>2</sub>)</p>



項目2	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【C02吸収量】 0(t-C02)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 対照区については2022年のデータと2025年のデータにおいて藻場の状態に変化は確認できず、自然変動の影響はないと判断できる。また活動区においては2022年は藻場の消失が確認できる。以上のことを踏まえ、ベースラインはゼロに設定する。</p> <p>【資料】 C02吸収量算定に関する資料.pdf</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	2.935(t-C02)

合計のクレジット認証対象の吸収量	9.6 t
------------------	-------